



難病患者やその家族の支援活動で学内外から高い評価を得ているボランティアサークル「Lovers～難病患者・家族を支える会」。昨年10月まで1年半にわたり部長を務めた前田茉穂さん（医学検査学科3年）がこのほど、学部長表彰（社会活動賞）を受けました。「自分の存在が誰かのためになれば」。そんな思いが前田さんを支えています。

### ボランティアサークル「Lovers～難病患者・家族を支える会」前部長

前田 茉穂さん（医学検査学科3年）

鹿児島市出身の前田さんとLoversとの出会いは偶然でした。高校1年時に参加した臨床検査技師に関するイベントで、生き生きと動き回る本学の卒業生を目の当たりにし、早速、大学ホームページにアクセス。そこで難病の患者をサポートしているLoversの活動を知ったといいます。「最初は難病患者ってどんな人だろうって。活動についても想像が付きませんでした」と前田さん。HPで知った本学の雰囲気とLoversの存在に魅かれ、熊保大進学、そしてLovers入部に迷いはありませんでした。

サークルの活動は年に20回ほど。病気の進行によって手足が不自由になったり、うまく話せずに1人ではコミュニケーションをとるのが難しかったりする患者が集まる会のサポートや、慰問演奏など様々な形で患者・家族と接しています。前田さんが部長になったのは2年次に進級した直後。新型コロナウイルス感染が落ち着きを見せ始めた時期。コロナ禍により停滞、あるいは途切れていたさまざまな活動を再開させていかななくてはなりません。

加えて、「Loversの存在の大きさも重くのしかかった」といいます。「先輩たちの伝統を私が壊してはいけない、内閣府特命担当大臣表彰を受けたクラブを続けさせないと、というプレッシャーから精神的にも体力的にもきつい時期がありました」と胸の内を語ってくれました。

それでも活動を続けてこられたのは「私がいることで誰かが元気になれるなら」という思いから。「かかわった患者さんが笑顔になったり、できることが増えたり、やりがいを感じたりすることが多くなるにつれ、喜びが勝るようになった」と振り返ります。一方で、「Loversの活動を言い訳に学業を疎かにしたくない」という思いも芽生え、友人のサポートを得ながら今

苦労より喜び勝る活動「誰かのためになれば」



「引き継いだサークルの伝統を壊したくなかった」と話す前田さん

まで以上に勉学にも励むようになったといいます。

Loversでの活動が大学生活の軸となり、大きく成長した前田さん。「これからも活動を続けつつ、勉強との両立を図りたい」と話します。「臨床検査技師になると患者さんと接する機会が少なくなるので、大学生の間はたくさんコミュニケーションをとりたいですし、学生のサポートを楽しみにしている患者さんも多いので、後輩に引き継ぎつつサポートを続けていきたいです」。Loversを通して得た喜びや苦労を胸に、思い描く未来へと進んでいきます。

## 寒波にも負けず 九州7会場で一般選抜

合格発表  
19日

学部の令和7年度一般選抜を4日（火）、実施しました。本学（熊本）、福岡、長崎、大分、宮崎、鹿児島、那覇の7カ所に試験会場を設け、九州各地から多くの受験生が集まりました。各会場では、緊

張した面持ちで参考書を手に持つ受験生、それを見送る保護者など、いつものがらの受験風景が見られました。

今シーズン最大規模の寒波が押し寄せる中、降雪の影響で無事に実施できるか心配さ

れましたが、大きなトラブルもなく滞りなく終了しました。合格発表は19日（水）で、大学入学共通テスト利用選抜（前期日程）と併せて発表します。

（入試・広報課）

# 40～70代 老後の自宅生活 8割が重要視



## 少ない「具体的な準備」

岩下准教授グループ調査

40～70歳代の8割が、老後の自宅での生活を重要視している一方で、具体的な準備を進めている人は少ないことが、岩下佳弘准教授（リハビリテーション学科理学療法専攻）＝写真＝らのチームによる調査で明らかになりました。岩下准教授は「自宅生活を維持するためにもスマートデバイスの活用や地域コミュニティへの啓発活動が今後ますます必要となる」と指摘しています。

この調査は、2022年12月から2023年3月にかけて、熊本県内在住の40～70歳代の男女を対象に「自宅生活への意識」「住環境とスマートデバイス」「地域社会とのかかわり」についてのWebアンケートを行い、235人から回答を得ました。その結果、回答者の79.9%が、自宅での生活を「非常に重要」または「重要」と考えていることが分かりました。しかし、具体的な準備を進めている人は少なく、年齢が低くなるにつ

れその傾向が顕著でした。

また、高齢者の自立と生活の質（QOL）を支えるうえで有効とされるスマートデバイスの所持率は14.2%と低く、特に高齢層や低所得層では普及が進んでいません。さらに、地域社会との関わりについては、38.3%が「地域の交流や活動の場がない」または「知らない」と回答。これらの結果から、スマートデバイスの利活用に向けた啓発の支援や、将来の孤独感や孤立のリスクを軽減するための地域コミュニティへの支援の必要性が浮き彫りになりました。

調査結果と分析は、「老後の自宅生活継続のための準備状況」（岩下佳弘、戸渡洋子、爲近岳夫、荒木善光、田中理恵、大森久光）のタイトルで、1月発刊の『総合リハビリテーション』第53巻第1号に掲載されています。

(NL編集部)

健康・スポーツ  
教育研究センター

レポート

## 2年目の「阿蘇プロジェクト」成果報告会

### 高まった「健康寿命延伸」への意識

本学と阿蘇市、阿蘇中央高校との包括連携協定に基づく「阿蘇プロジェクト」の令和6年度成果報告会を1月28日（火）、阿蘇市の一の宮保健センターで実施しました。

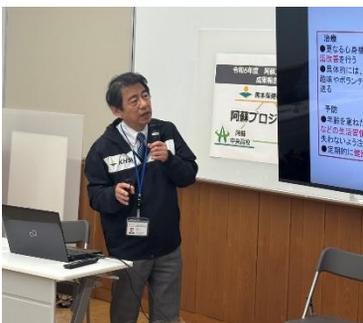
この日は、同高生徒2グループが「阿蘇市民の健康寿命の延伸」をテーマに実践発表。本学リハビリテーション学科3専攻（理学療法学・生活機能療法学・言語聴覚学）の教員が過去2回の体力測定会の結果を報告した後、健康・スポーツ教育研究センターの荒木栄一センター長がプロジェクトの総括発表を行いました。

本年度の阿蘇プロジェクトでは、65歳以上の阿蘇市民を対象に、昨年6月と11月に体力測定会を開催し、本学教員と学生、市職員、同校生徒が、「運動」「栄養（食事）」「社会参加」に関する調査を行いました。学生と生徒たちは、1回目から2回目の体力測定会までの5カ月の間、参加者に電話を入れ、予防活動の継続を支援してきました。

昨年度の成果報告会では、高校生の発表と参加者の体力がどのように変化したかを報告しました。2年目となる今年度の成果報告会では、予防運動に関する参加者の悩み相談ができる場を設け、実践形式の予防運動を展開しました。このため、報告会も一方向的な結果報告でなく、参加者にとっては活発なコミュニケーションの場となり、これからの予防活動を楽しみ続けられるきっかけにもなったと思います。

プロジェクトに参加した生徒たちによると、地元市民との交流の場を新たに設ける企画があるそうで

す。プロジェクトを通して、健康寿命の延伸に対する意識が高まっていることに感銘を受けました。2年間、阿蘇プロジェクトに取り組んできて、熊本保健科学大学・阿蘇市・阿蘇中央高校の3者の結束力が高まってきたと感じられます。そして、3者が阿蘇市民の健康寿命延伸という一つの目標に向かってきたことで、それぞれがより良い方向に向かっていると思われれます。（健康・スポーツ教育研究センター 中村祐貴）



写真上は、総括発表をする荒木センター長。同下は、住民を前に実践発表に臨む阿蘇中央高校の生徒たち





前後期の学修支援を終え、笑顔のリーダー学生たち

## 1年次「アカデミックスキル」科目支援

アカデミックスキル  
支援センター

レポート

# リーダー学生 前後期駆け抜けた!

## 週2回の課外研修受け 授業盛り上げ

1年次生を対象とした全学必修科目「アカデミックスキルⅡ」（後期）が1月に終了しました。前期「アカデミックスキルⅠ」に続き、29人のリーダー学生が、週1回の研修を受けながらクラスメートへの学修支援。前後期を駆け抜けた満足感とともに、新年度開講の「アカデミックスキルⅢ」（2年次生対象）に向け、英気を養っています。

「アカデミックスキル」は読む・書く・伝えるための基礎的なスキルを身に付けるとともに、学びへの構えをつくることを目的に開講されています。最大の特徴は、学生が授業づくりに参画し、内容を逐次カスタマイズさせながら自律的に学ぶ環境を演出していること。その原動力となっているのが学生リーダーです。

学生リーダーは、アカデミックスキルⅠ開講直後に受講学生の中から募り、毎週2回、アカデミックスキル支援センターによる課外研修で授業内容を先行学修。授業中はもとより課外においてもクラスメートの良き相談役となり授業を支えてきました。

「伝える」ことの大切さを体験してもらうア

カデミックスキルⅠでは、小学生を対象にした寸芸を率先して披露し、授業全体の雰囲気盛り上げました。また、ライティングに特化したアカデミックスキルⅡでは、主張の決定、アウトラインづくりなど難易度の高いグループ作業の中に積極的に飛び込み、アドバイザーとしての役割を果たしてきました。

「人前で話せるようになりたい」「書くことがうまくなりたい」。それぞれに目的をもって志望したリーダー学生たち。夢中で前後期を走り抜け、その表情は晴れやかです。本年度センター学生指導員に採用された上久保翔真さん（医学検査学科）は「活動を通じて出会えた先輩や先生方、学友からもらう日々の刺激が、自身を成長させてくれました。学びを本気で追求するという、貴重な経験をさせてもらったことが、何よりの収穫です」と話していました。

リーダー学生たちは、4月に始まる最終科目の「アカデミックスキルⅢ」（プレゼンテーション）に向け、3月下旬から準備に入ります。

(NL編集部)

ネット  
よもやま話

4

ボイスフィッシング

## 巧妙に電話組み合わせた新手の詐欺

皆さんは「ボイスフィッシング」をご存じでしょうか？ 以前、このコーナーでも取り上げました、偽メール等で偽サイトに誘導しIDやパスワード等の情報を盗んだりする「フィッシング」詐欺に電話を組み合わせた新手の詐欺です。

手口の概要は、

①犯人が銀行担当者を騙り、被害者に電話をかけ（自動音声の場合あり）、メールアドレスを聞き出す。

②犯人が偽メールを送信し、電話で指示しながら被害者を偽サイトに誘導。そして、インターネットバンキングのIDやパスワード等の情報を入力させて、盗み取る。

③偽サイトに入力させた情報を使って、犯人が被害者の口座から資産を不正に送金する。

となっています。「振り込め詐欺」にも似ている手口です。

対策は「知らない電話番号からの着信は信用しないこと」です。もし、銀行担当者をかたる者から連絡があった場合には、銀行の代表電話に連絡して確認しましょう。なお、金融機関が、ID、パスワード等をメールやSMSで問い合わせることはありません。不安な場合はIR・情報システム室までお問い合わせください。

(共通教育センター 山鹿 敏臣)

# 天気やニュース、広告を放映

## ユニバーシティ・ビジョンお目見え

大型ビジョンでさまざまな情報や広告を掲示するユニバーシティ・ビジョン（デジタル・サイネージ）が、レストラン「ピリア」にお目見えしました。3日（月）から稼働しています。

デジタル・サイネージは、広告の掲載や施設の情報を発信するモニターのことで、自治体や病院の窓口などに置かれています。今回設置されたビジョンでは、学内情報、天気、ニュースに加え、学生の就職先に関連した広告を放映する予定です。大学に支払われる放映料はレストランの健康食補助事業に充てられ、学生たちの健康づくりにも役立てられます。

設置台数は5台で、券売機前とレストランの前方・後方に2台ずつ設置。講義が開講される時間を除き平日の午前11時～午後7時に放映されます。（NL編集部）



レストラン「ピリア」に設置された  
ユニバーシティ・ビジョン

## インフォメーション

### 週間行事予定（2月10日～2月18日）

2/10（月）	【オンライン形式】キャリア教育セミナー（看護学科）
2/12（水）	就勝ガイダンス（医学検査学科）
2/13（木）	国家試験（助産師）
2/13（木）	入学前サポート Q&Aセッション
2/13（木）	教育関係共同利用拠点 令和6年度第5回FD/SD研修会
2/13（木）、14日（金）	職種紹介（医学検査学科）
2/14（金）	国家試験（保健師）
2/15（土）	国家試験（言語聴覚士）
2/16（日）	国家試験（看護師）